大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

# 編集後記



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2014-04-23<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 住友, 陽文<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | http://hdl.handle.net/10466/13782 |

人間科学：大阪府立大学紀要 9（2013），101（2014年3月刊行）

# 編集後記

「戦後レジームからの脱却」と憲法改正を政権の大きな課題に掲げる安倍首相のことを、「戦前回帰」とか「軍国主義の復活」と評することがある。詳細は避けるが、これは私は間違いだと思う。この政権になにがしかの危うさがあるとすれば、それは、立憲主義の危機であり、近代まるごと否定の可能性をはらむ危機ではないか。つまりそれは、未知の危機なのだ。しかし、相変わらず「戦前回帰」という定型化した批判がちまたで溢れている。

相変わらずそういう批判を続ける人たちは、目の前の何ほどかの危機に対して、自分たちが知っている過去のデータファイルのうちから、それがどれにあてはまるかカテゴライズをしているだけではないか。今起きていることは、やはり新しいことなのだ。

ただ、その新しいことも、それなりに歴史的に起源を持つはずだ。だとすれば、まったく新しく見えている現在進行形の事態も、実はわれわれが知らないだけで、それはやはり過去にそれを惹起させる、何か一見気づきにくい構造や原理のようなものが存在していたはずである。

われわれは、遠い過去のことだとして見ていた歴史について、実はまだそれほどよく知らないだけなのかもしれない。だからこそ、歴史を見直すことはやはり必要で、その見直しが進むと、今起きている事の淵源が分かり、それへの対処もまた決まってくる。

ひるがえって「戦前回帰」などと言う歴史家は、だから本当は知的怠慢を犯しているのだ。今起きている事態を新しい事態と考え、その歴史的淵源を考え、そして考えた結果、歴史の観方が変わり、そして今起きている事態への評価もまた今までにない新たなものになるというものでなければならない。そういうことを考え、明らかにしようとする試みは、かなり困難に違いない。が、そういう試みが今こそ求められているのだと、われわれを取り巻く環境を眺める時、そう思う。そして、そのことを考え、生き延びていくだけでなく、それを乗り越える思想を改めて鍛え直さなければならないのだとも思う。人文科学系の教員に課せられた責任も軽くない。

最新号をお届けいたします。どうぞご味読下さい。

最後になりましたが、投稿していただいた教員のみなさま、多忙ななか貴重な学問の成果を寄稿していただき、感謝申し上げます。　　（文責　住友陽文）